6. 活動組織の拡大

従来NLGRはALNが企画し、ボランティアを募って準備と実施を行ってきた。2011年からはNLGR+実行委員会を形成し、そこが中心となって企画と実働を担った。もちろんALNは中軸に位置するのであるが、広い範囲の人々の参画を可能にした。

また、riseの運営もこれまではALNが行ってきたが、2011年度からはHIV感染の予防啓発に関心を有するグループの代表や個人が十数名からなる運営委員会を構成し、その協議のもとに活動を企画、実践する方式に変更した。この場合ももちろんALNが中軸に位置するのであるが、よりひろい範囲の人々の参加の下に予防啓発を行う体制を整えた訳である。

D. 考察

ALNの活動はここ数年ほぼ変わりなく実行されている。イベント開催を含むHIV関連情報の発信、コンドームアウトリーチ、無料HIV検査会の実施、のいずれの分野でも、少ないスタッフで継続的な活動を実施してきた。これを持続させるのは、なかなか困難なことである。2011年もほぼ同じ実績を上げることができた。ただ、予防啓発活動の範囲、規模、内容、いずれの点を取ってもいまだ十分とは言えない。範囲と規模の拡大、内容の充実を求めていかねばならない。

ALNの活動あるいは名古屋地区のHIV感染症の予防啓発活動をさらに発展させる動きが出始めた。2001年から行われてきたNLGRの主催を、従来のALN単体から、ALNのみならず他のHIV関連団体やゲイバーやクラブの関係者、他にNLGRに賛同する個人からなる拡大実行委員会を結成して行うことになった。多くの人々の知恵やアイデアが寄せられ、また他方面との協働が実現することになり、NLGRの新たな歴史への第一歩が踏み出されたと考えられる。2011年のNLGR+は例年とほぼ同じかそれ以上の参加者が得られたと推測され、次年度以降のNLGR＋に大きな期待が寄せられる。

NLGRをめぐる上述の動きを、NLGRにとどめるのではなく、ALNの予防啓発活動全般に及ぼそうと、riseの活動もALN単体ではなく、多くの人々の参加のもとに行われる基礎作りが2011年になされた。HIV予防啓発活動の範囲と規模の拡大と内容の充実を実現していけるものと考える。

HIV検査の重要性は言うまでもない。愛知では先年度に報告したとおり、保健所でのHIV検査はそれなりに拡充が図られてきたが、保健所以外の施設でのHIV検査が乏しい。それを補う意味でも、従来のNLGRに付随するHIV検査とM検は今後も継続していきたい。さらに、HIV検査を必要とする人々に受験していただくにはどのようなあり方がいいのか、さらに十分検討する必要があると思われる。

今回初めて岐阜県からHIV検査会の協力要請があった。これまでのNLGR検査会とM検の実績が評価された結果と思われる。JR岐阜駅の構内スペースを利用して実施されたが、混乱もなくプライバシーも守られ、次年度からの進展が期待される

HIV教育は当然のことながら極めて重要である。しかし、教育を授ける側がHIV/エイズに対して正確な知識と適切な構えを有していないと、その効果は限られたものになることが予想される。我々は2006年より名古屋市内の私立大学で、将来教師になるだろう学生を対象に、Group Investigation (GI) モデルを応用したエイズ学習を実践してきた。本学習はイスラエルのSharan夫妻が開発した共同学習理論に基づくもので、小グループに分かれた学生がそれぞれのサブテーマについて12～15時間をかけて共同且つ主体的参加で勉強し、まとめ、最後にそれらを発表し、異なるサブテーマの領域の内容も勉強するものである。昨年報告したように、知識や関心、態度といった認知面では積極的な方向への変

化が認められたが、「感染不安」や「コンドーム使用」などの感情面や行動面に関しては有意な変化は認められなかった。しかし、この事業を継続することは、将来の若者の行動変容に間接的につながる可能性を十分有すると期待されるので、今後も可能な限り続けていきたいと考えている。なぜなら、共同学習という人との関係性を介在させた学習は、その個人にとって将来何らかの行動変容に効果的な影響を及ぼす可能性を秘めており、今後の進展を期待したい。

我々の予防啓発活動は 2000 年に開始された。基本的には前述の 3 つの領域にわたる活動を継続してきたわけであるが、これらの活動が HIV 感染予防に対する効果を発揮したかどうかが、問われている。予防啓発が浸透する順序としては、次のモデルが考えられる。まず、HIV 関連情報が多くの人々に伝えられ、次いでその情報によって行動変容がなされ、その結果 HIV 感染者/エイズ患者が減少する、という 3 段階モデルである。すなわち、情報の拡がり、行動変容、陽性者の減少、の 3 段階である。我々の活動がどのような効果を及ぼしたかを、究極の効果判定指標である新規 HIV 陽性者の減少の有無を尺度として、効果判定を行った。ただし、予防啓発活動が効果を発揮すれば一時的には HIV 感染者が増加することが予想される。この場合、検査が普及するわけであるから、エイズ患者は絶対的にも相対的にも減少することが期待される。なぜなら、検査が普及すれば、早期診断につながるからである。そのため、ここでは名古屋医療センターにおける新規 AIDS 患者の絶対数とその割合の推移を検討した。

表 2 に示されるごとく、MSM の実際の新規 HIV 陽性者数は依然として高く、しかもその中の AIDS 患者割合は減少傾向にはない。すなわち、未だ早期診断への傾向は認められていない。

今後、どのような予防啓発が必要かを、あらためて考え直す時期に来ている。一般的な HIV 関連情報の中に MSM 向けの情報を忍ばせる方法は、新たな方法と思われる。ALN の日常的な活動を広げるとともに、上記のような新たな視点の活動が必要とされている。

E. 結語

1. ALN の予防啓発活動は、HIV 関連情報の発信、コンドームアウトリーチ、無料 HIV 検査の開催、の 3 方法で進められた。ほぼこれまでと同様の成果を上げたが、ALN の活動評価の結果からはさらなる活動の拡充が求められている。今後は、活動主体を ALN を含む関係者の緩やかな連合体に移行し、より広範囲の人々からなる予防啓発活動を実現していきたい。

2. 2011 年に初めて岐阜県による MSM を対象にした無料 HIV 検査が行われた。ALN のこれまでの HIV 検査に対する取り組みが地方自治体に影響を及ぼした結果と考えられる。

3. 将来エイズ教育を担うだろう教師を目指す学生に対するエイズ学習を今後も継続し、将来の若者に対する間接的効果を期待したい。

F. 発表論文等

1. ○吉澤繁行, 塩野徳史, 新ヶ江章友, 金子典代, コーナ ジェーン, 市川誠一, 石田敏彦, 藤浦裕二, 真野新也, 内海眞：名古屋の無料 HIV 抗体検査会を併設した屋外イベント NLGR 来場者における来場経験別 HIV 抗体検査受検経験率とコンドーム常用率, 第 25 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2011 年 11 月 30 日, 東京

2. ○塩野徳史, 新ヶ江章友, 金子典代, 市川誠一, 山本正弘, 健山正男, 内海眞, 生島嗣, 鬼塚哲郎：ゲイ向け商業施設利用者対象の質問紙調査による地域別予防啓発事業の評価に関する研究, 第 25 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2011 年 11 月 30 日, 東京

表３　NLGR 来場者のゲイ・バイセクシュアル男性における経年推移(2009-2011)

	年度 2009		2010		2011		合計		Pearson カイ２乗
年齢階級									
24歳以下	85	21.5%	71	21.8%	47	16.7%	203	20.3%	0.10
25-29歳	80	20.2%	59	18.2%	65	23.1%	204	20.4%	
30-34歳	82	20.7%	87	26.8%	68	24.2%	237	23.7%	
35-39歳	85	21.5%	61	18.8%	42	14.9%	188	18.8%	
40-44歳	32	8.1%	22	6.8%	33	11.7%	87	8.7%	
45歳以上	32	8.1%	25	7.7%	26	9.3%	83	8.3%	
合計	396	100.0%	325	100.0%	281	100.0%	1002	100.0%	
居住地域									
名古屋市	120	30.3%	92	28.3%	72	25.6%	284	28.3%	0.18
愛知県(名古屋市を除く)	101	25.5%	89	27.4%	78	27.8%	268	26.7%	
岐阜県	21	5.3%	15	4.6%	17	6.0%	53	5.3%	
三重県	13	3.3%	19	5.8%	9	3.2%	41	4.1%	
静岡県	17	4.3%	15	4.6%	14	5.0%	46	4.6%	
東京都・神奈川県・埼玉県	31	7.8%	38	11.7%	36	12.8%	105	10.5%	
大阪府・京都府・兵庫県・滋賀県	55	13.9%	23	7.1%	29	10.3%	107	10.7%	
その他	38	9.6%	34	10.5%	26	9.3%	98	9.8%	
合計	396	100.0%	325	100.0%	281	100.0%	1002	100.0%	
NLGRの宣伝について見たものはありますか？(複数回答)									
ゲイ雑誌	117	29.5%	91	28.0%	62	22.1%	270	26.9%	0.08
NLGR冊子	157	39.6%	130	40.0%	118	42.0%	405	40.4%	0.81
ポスターやフライヤー	126	31.8%	112	34.5%	103	36.7%	341	34.0%	0.42
その他	57	14.4%	79	24.3%	52	18.5%	188	18.8%	<0.01
NLGRについてどこから情報を得ましたか？(複数回答)									
internet	217	54.8%	218	67.1%	192	68.3%	627	62.6%	<0.01
商業施設	157	39.6%	143	44.0%	104	37.0%	404	40.3%	0.20
恋人/友達	263	66.4%	189	58.2%	183	65.1%	635	63.4%	0.06
rise	33	8.3%	27	8.3%	17	6.0%	77	7.7%	0.48
過去６カ月間に以下の施設で利用したものがありますか？(複数回答)									
ゲイバーやレズビアンバー	234	59.1%	234	72.0%	207	73.7%	675	67.4%	<0.01
ゲイナイト・ビアンナイト	110	27.8%	117	36.0%	99	35.2%	326	32.5%	0.03
ゲイショップ	137	34.6%	129	39.7%	109	38.8%	375	37.4%	0.32
有料ハッテン場	-	-	128	39.4%	130	46.3%	-	-	0.09
野外ハッテン場	60	15.2%	44	13.5%	39	13.9%	143	14.3%	0.81
ハッテンで有名な公共施設	-	-	72	22.2%	73	26.0%	-	-	0.27
過去６カ月間にインターネットで利用したものがありますか？(複数回答)									
PC出会い系サイトや掲示板	167	42.2%	119	36.6%	117	41.6%	403	40.2%	0.27
携帯出会い系サイトや掲示板	168	42.4%	145	44.6%	119	42.3%	432	43.1%	0.80
ミクシィ(mixi)	305	77.0%	239	73.5%	185	65.8%	729	72.8%	0.01
ゲイ向SNS	201	50.8%	163	50.2%	158	56.2%	522	52.1%	0.26
位置情報が必要なサイト	-	-	-	-	176	62.6%	-	-	-
NLGR来場頻度									
初回来場	-	-	148	45.5%	122	43.4%	270	44.6%	0.60
複数来場	-	-	177	54.5%	159	56.6%	336	55.4%	
合計			325	100.0%	281	100.0%	606	100.0%	

表4　NLGR 来場者の東海地域在住ゲイ・バイセクシュアル男性における経年推移Ⅰ(2009-2011)

	年度 2009		2010		2011		合計		Pearson カイ2乗
年齢階級									
24歳以下	62	22.8%	56	24.3%	38	20.1%	156	22.6%	0.37
25-29歳	62	22.8%	43	18.7%	41	21.7%	146	21.1%	
30-34歳	52	19.1%	61	26.5%	50	26.5%	163	23.6%	
35-39歳	55	20.2%	39	17.0%	25	13.2%	119	17.2%	
40-44歳	18	6.6%	14	6.1%	17	9.0%	49	7.1%	
45歳以上	23	8.5%	17	7.4%	18	9.5%	58	8.4%	
合計	272	100.0%	230	100.0%	189	100.0%	691	100.0%	
居住地域									
名古屋市	120	44.1%	92	40.0%	72	38.1%	284	41.1%	0.69
愛知県(名古屋市を除く)	101	37.1%	89	38.7%	78	41.3%	268	38.8%	
岐阜県	21	7.7%	15	6.5%	17	9.0%	53	7.7%	
三重県	13	4.8%	19	8.3%	9	4.8%	41	5.9%	
静岡県	17	6.3%	15	6.5%	13	6.9%	45	6.5%	
合計	272	100.0%	230	100.0%	189	100.0%	691	100.0%	
NLGRの宣伝について見たものはありますか？(複数回答)									
ゲイ雑誌	72	26.5%	66	28.7%	42	22.2%	180	26.0%	0.32
NLGR冊子	103	37.9%	94	40.9%	77	40.7%	274	39.7%	0.74
ポスターやフライヤー	101	37.1%	91	39.6%	66	34.9%	258	37.3%	0.62
その他	39	14.3%	50	21.7%	31	16.4%	120	17.4%	0.09
NLGRについてどこから情報を得ましたか？(複数回答)									
internet	141	51.8%	153	66.5%	132	69.8%	426	61.6%	<0.01
商業施設	122	44.9%	110	47.8%	75	39.7%	307	44.4%	0.24
恋人/友達	175	64.3%	137	59.6%	119	63.0%	431	62.4%	0.54
rise	30	11.0%	23	10.0%	13	6.9%	66	9.6%	0.32
過去6カ月間に以下の施設で利用したものがありますか？(複数回答)									
ゲイバーやレズビアンバー	150	55.1%	159	69.1%	125	66.1%	434	62.8%	<0.01
ゲイナイト・ビアンナイト	53	19.5%	78	33.9%	51	27.0%	182	26.3%	<0.01
ゲイショップ	76	27.9%	84	36.5%	65	34.4%	225	32.6%	0.10
有料ハッテン場	-	-	91	39.6%	87	46.0%	-	-	0.18
野外ハッテン場	43	15.8%	32	13.9%	24	12.7%	99	14.3%	0.63
ハッテンで有名な公共施設	-	-	49	21.3%	46	24.3%	-	-	0.46
過去6カ月間にインターネットで利用したものがありますか？(複数回答)									
PC出会い系サイトや掲示板	119	43.8%	78	33.9%	79	41.8%	276	39.9%	0.07
携帯出会い系サイトや掲示板	125	46.0%	101	43.9%	85	45.0%	311	45.0%	0.90
ミクシィ(mixi)	202	74.3%	155	67.4%	111	58.7%	468	67.7%	<0.01
ゲイ向SNS	140	51.5%	115	50.0%	108	57.1%	363	52.5%	0.31
位置情報が必要なサイト	-	-	-	-	110	58.2%	-	-	-
NLGR来場頻度									
初回来場	-	-	91	39.6%	76	40.2%	167	39.9%	0.89
複数来場	-	-	139	60.4%	113	59.8%	252	60.1%	
合計			230	100.0%	189	100.0%	419	100.0%	

表5　NLGR 来場者の東海地域在住ゲイ・バイセクシュアル男性における経年推移Ⅱ(2009-2011)

	年度						合計		Pearson カイ２乗
	2009		2010		2011				
あなたは、ANGEL LIFE NAGOYAの配布しているコミュニティペーパーHANAを知っていますか？									
読んだ	49	18.0%	44	19.1%	29	15.3%	122	17.7%	0.20
知っているけど読んだことはない	22	8.1%	32	13.9%	24	12.7%	78	11.3%	
知らない	201	73.9%	154	67.0%	136	72.0%	491	71.1%	
合計	272	100.0%	230	100.0%	189	100.0%	691	100.0%	
あなたは、コミュニティセンターriseを知っていますか？									
行ったことがある	63	23.2%	51	22.2%	40	21.2%	154	22.3%	0.27
知っているけど行ったことはない	67	24.6%	41	17.8%	48	25.4%	156	22.6%	
知らない	142	52.2%	138	60.0%	101	53.4%	381	55.1%	
合計	272	100.0%	230	100.0%	189	100.0%	691	100.0%	
過去6ヶ月間にアナルセックスをしたことがありますか？									
ある	169	62.1%	148	64.3%	114	60.3%	431	62.4%	0.69
ない	103	37.9%	82	35.7%	75	39.7%	260	37.6%	
合計	272	100.0%	230	100.0%	189	100.0%	691	100.0%	
過去6ヶ月間のコンドーム使用＊1									
非常用	86	50.9%	82	55.4%	73	64.0%	241	55.9%	0.09
常用	83	49.1%	66	44.6%	41	36.0%	190	44.1%	
合計	169	100.0%	148	100.0%	114	100.0%	431	100.0%	
過去6ヶ月間の特定相手とのコンドーム使用＊2									
非常用	75	45.7%	72	50.7%	71	63.4%	218	52.2%	0.01
常用	89	54.3%	70	49.3%	41	36.6%	200	47.8%	
合計	164	100.0%	142	100.0%	112	100.0%	418	100.0%	
過去6ヶ月間のその場限りの相手とのコンドーム使用＊3									
非常用	56	39.2%	48	39.0%	49	48.0%	153	41.6%	0.30
常用	87	60.8%	75	61.0%	53	52.0%	215	58.4%	
合計	143	100.0%	123	100.0%	102	100.0%	368	100.0%	
これまでにHIV抗体検査を受けたことがありますか？（今回を除く）									
ある	207	76.1%	155	67.4%	114	60.3%	476	68.9%	<0.01
ない	65	23.9%	75	32.6%	75	39.7%	215	31.1%	
合計	272	100.0%	230	100.0%	189	100.0%	691	100.0%	
過去１年間にHIV抗体検査を受けたことがありますか？（今回を除く）									
受けた	123	45.2%	75	32.6%	52	27.5%	250	36.2%	<0.01
受けなかった	84	30.9%	80	34.8%	62	32.8%	226	32.7%	
生涯受検経験なし	65	23.9%	75	32.6%	75	39.7%	215	31.1%	
合計	272	100.0%	230	100.0%	189	100.0%	691	100.0%	

＊１過去６ヶ月間のアナルセックス経験がある人を分析対象としたため総数は異なる

＊２過去6ヶ月間に特定相手とのアナルセックス経験がある人を分析対象としたため総数は異なる

＊３過去6ヶ月間に不特定相手とのアナルセックス経験がある人を分析対象としたため総数は異なる

表6　NLGR 来場者の東海地域在住ゲイ・バイセクシュアル男性における経年推移　年齢別分析(2009-2011)

	29歳以下							30-39歳							40歳以上					
年度	2009		2010		2011			2009		2010		2011			2009		2010		2011	
	n	%	n	%	n	%		n	%	n	%	n	%		n	%	n	%	n	%
NLGR来場頻度																				
初回来場	-	-	53	53.5%	44	55.7%		-	-	29	29.0%	21	28.0%		-	-	9	29.0%	11	31.4%
複数来場	-	-	46	46.5%	35	44.3%		-	-	71	71.0%	54	72.0%		-	-	22	71.0%	24	68.6%
合計	-	-	99	100.0%	79	100.0%		-	-	100	100.0%	75	100.0%		-	-	31	100.0%	35	100.0%
これまでにHIV抗体検査を受けたことがありますか？（今回を除く）																				
ある	88	71.0%	62	62.6%	34	43.0%	**	89	83.2%	72	72.0%	54	72.0%		30	73.2%	21	67.7%	26	74.3%
ない	36	29.0%	37	37.4%	45	57.0%		18	16.8%	28	28.0%	21	28.0%		11	26.8%	10	32.3%	9	25.7%
合計	124	100.0%	99	100.0%	79	100.0%		107	100.0%	100	100.0%	75	100.0%		41	100.0%	31	100.0%	35	100.0%
過去１年間にHIV抗体検査を受けたことがありますか？（今回を除く）																				
ある	53	42.7%	42	42.4%	17	21.5%	**	52	48.6%	25	25.0%	24	32.0%	**	18	43.9%	8	25.8%	11	31.4%
ない	71	57.3%	57	57.6%	62	78.5%		55	51.4%	75	75.0%	51	68.0%		23	56.1%	23	74.2%	24	68.6%
合計	124	100.0%	99	100.0%	79	100.0%		107	100.0%	100	100.0%	75	100.0%		41	100.0%	31	100.0%	35	100.0%
過去6ヶ月間のコンドーム使用(1)																				
非常用	45	54.9%	44	63.8%	28	53.8%		31	48.4%	32	50.8%	36	75.0%	**	10	43.5%	6	37.5%	9	64.3%
常用	37	45.1%	25	36.2%	24	46.2%		33	51.6%	31	49.2%	12	25.0%		13	56.5%	10	62.5%	5	35.7%
合計	82	100.0%	69	100.0%	52	100.0%		64	100.0%	63	100.0%	48	100.0%		23	100.0%	16	100.0%	14	100.0%

#Pearson のカイ２乗検定による　**　p<0.01

(1)過去６ヶ月間のアナルセックス経験がある人を分析対象としたため総数は異なる

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
MSMのHIV感染対策における企画、実施、評価の体制整備に関する研究

近畿地域のMSMにおけるHIV感染対策の企画と実施

研究分担者：鬼塚哲郎（京都産業大学文化学部　教授）
研究協力者：川畑拓也（大阪府立公衆衛生研究所）、岳中美江（公益財団法人エイズ予防財団/特定非営利活動法人CHARM）、山田創平（京都精華大学）、辻宏幸、後藤大輔、町登志雄、中村文昭（公益財団法人エイズ予防財団/MASH大阪）、内田優、有田匡、鍵田いずみ、赤田知華子、原澤俊也、祝雄一、大畑泰次郎（MASH大阪）、木村博和（横浜市健康福祉局）、日高庸晴（宝塚大学）、金子典代、ジェーン・コーナー、塩野徳史、市川誠一（名古屋市立大学看護学部）

研究要旨

平成23年度、MASH大阪は以下の介入プログラムを執行した：

1.一次予防関連プログラム

1）コミュニティレベル

月刊のコミュニティペーパー＜SaL+＞の発行を継続して行った。2011（平成23）年4月～2012（平成24）年1月の期間に、月平均で、192店舗および42団体に17.5名のボランティアが約6700部を配布した。内容に関しては昨年度に引き続き本年度もエイズ予防/セクシュアルヘルス関連情報を前面に押し出した。

2）グループ・個人レベル

(1)ドロップインセンター＜dista＞関連事業を執行した。平成23年4月～平成24年1月の期間に、月平均605.4名が来場した。そのうち初来場者は月平均59.5名で期間全体としては595名であった。来場者数・初来場者数のいずれもが前年比で減少している。減少の主な理由として、これまでに多くの来場者を集めてきた予防啓発イベント＜PLuS+＞が本年度開催されなかったことが挙げられる。相談件数は期間全体としては162件であった。相談体制の強化と今後の体制構築を目的とした「コミュニティセンターにおける対人支援」についての会議を設け、相談事例と対応内容についての共有を行い、利用者に対し適切な支援をするために必要な基礎知識やリソース先の整理、技術の習得を促した。

(2)STI勉強会＜Café ChatおよびBoy×Boy＞を執行した。毎月趣向を変え工夫を凝らして開催した。参加者は参加者無し～18名であった。

(3)若年層ネットワーク構築支援プログラム＜Step＞を4月、6月、7月、8月に開催、総計121名が参加、うち30名が初参加であった。

(4)ハッテン場におけるセーファーセックス促進環境整備プログラム＜ハッテン場プロジェクト～β～＞（商業系ハッテン場等でのコンドーム普及100％作戦）は、スタッフ不足により本年度は凍結した。

2. 二次予防関連プログラム

1)「エイズ予防のための戦略研究」により平成19～22年度に実施されたSTIクリニックでの受検を促進するプログラムを、本年度からは厚生労働省「同性愛者等のHIVに関する相談・支援事業」で運営することになった。これに伴い、＜クリニック検査キャンペーン＞を平成23年12月～24年2月に設定し、広報プログラムを実施した。

2)平成24年1月、ゲイナイト「NUDE」の３階部分においてMSM向け予防啓発情報発信、関連映画上映、郵送検査キット配布を組み合わせた独自の一次・二次予防合体プログラム「club THIRD」を実施した。郵送検査の有効期間を２月末日に設定し、郵送検査のデメリットを補うプログラムを準備し、大阪地域MSMにおける検査行動の促進をはかった。

3. 三次予防関連プログラム

前項と同様、「エイズ予防のための戦略研究」によって整備されたHIV陽性の人のためのプログラム＜HIVサポートライン関西＞＜ひよっこクラブ＞が「同性愛者等のHIVに関する相談・支援事業」の一環としてNPO法人CHARMによって実施された。

A. 研究目的

本研究の目的は、平成23年度に執行された研究事業を記述・分析し、効果評価と照合することで、個別施策層向け予防介入事業のモデル構築を試みるところにある。

B. 研究対象と方法

本研究の対象は2011（平成23）年度にMASH大阪によって執行された予防介入プログラムであり、後述する効果評価の結果と比較検討したうえで考察を加える。比較検討、考察にあたっては、疫学とその周辺領域のみならず、組織論、ソーシャルマーケティング理論、社会学といった広い領域からの言及を行うこととする。

C. 研究結果

各プログラムの執行状況について順次報告する。

1. 一次予防関連プログラム

1）コミュニティレベル

(1)コミュニティペーパー＜SaL+＞の配布

（これまでの流れ）

2000（平成12）ー2002（平成14）年度に開催された臨時検査イベントSWITCHを通して得られた情報をコミュニティに還元するためのツールとして構想された＜SaL+＞は、2003（平成15）年度に入りコミュニティペーパー的性格を強めながらコミュニティに浸透してきた。

2004（平成16）年度実施したフォローアップ調査の結果、関連知識、受検行動、予防行動のいずれにおいても、受取り群には非受取り群と比較して有意な効果がもたらされた事が示唆された。

2009（平成21）年度からは、コミュニティ関連情報よりも、セクシュアルヘルス関連情報を前面に打ち出す方向転換を行った。具体的には下記の2点である。

①特集記事において、エンタテイメント性を保ちつつエイズ予防/セクシュアルヘルス関連のテーマを取り上げる。

②医師やMSWまたは検査技師等、専門職者のインタビュー記事を掲載する。

（目的）

・MASH大阪が把握している情報をコミュニティに還元する。

・配布活動を通じて、コミュニティとのネットワークを構築する。

・地域に密着した情報を発信し共有化をはかることで、コミュニティへの帰属意識を涵養する。

（方法）

今年度も昨年同様の編集方針で進め、発行部数もほぼ同程度で行なった。

（成果）

今年度の配布実績は（2012年1月末までの時点で）毎月平均で、192店舗と42団体に18.3名のボランティアスタッフが6668部を配布した。

年間を通して、発行部数のほとんどは、ゲイタウンや地域団体への配布であった。例年実施している大型のイベント＜PLuS+＞を本年は実施しなかったため、例年のような当該イベントでの配布は行われていない。

2010年、コミュニティペーパー＜SaL+＞のエイズ予防啓発メディアとしての特徴を明らかにするため、これまでに発行された＜SaL+＞について、文学的・文化研究的視点から読み返し、特集記事のテーマおよび文体の変遷、特集記事とコラム記事の関連性、の2点にフォーカスしつつ分析が行なわれた。その結果、1号から95号まで一貫してみられる特徴として、1)多声的な言説空間の構築がめざされている、2)セクシュアル・マイノリティであることを問題視しない、3)セックスを肯定的に捉える、4)HIV陽性であることを特別視しない、5)文体は「笑い」（ユーモアとアイロニー）を基本とする、がみられた。

変遷をたどる読みから見えてきた特徴としては、全95号は第1期（1号～12号）、第2期（13号～76号）、第3期（77号～95号）の三期に分類された。第1期では記者・編集者の声が中心であるのに対し、第2期では記者・コミュニティメンバー・専門職者の声が交じり合う傾向が強くなり、第3期ではこれに加え科学的・制度的言説（シグナル）と個人の観測・感情・破綻（ノイズ）が混在していることがあげられた。また、こうした変遷の要因として、MASH大阪と店舗との関係性の変化（開店したとき既にMASH大阪の事業が展開されているケースが増加）、編集長の性格、コミュニティ側のHIV関連情報に対するリアクションの変化（忌避から容認へ）の3点が示唆された。現状では第3期が継続していると思われる。

課題として、中高年MSMの感染者・患者報告数の増加をふまえ、中高年向け啓発資材の創出が望まれる。

2）グループ・個人レベル

(1) ドロップインセンター＜dista＞

（目的）

大阪地域のゲイ男性が利用する商業施設が多い地域に啓発普及の活動拠点を整備・運営し、HIV/STI感染予防に向けた啓発プログラムを戦略的に展開することを事業の目的とする。ドロップインセンターの機能は以下のとおり。

○予防啓発事業の拠点機能として

・啓発活動およびアウトリーチのベース基地（啓発の実施・普及機能）

・予防啓発に関わるスキル研修会・講習会会場（人材育成機能）

・セーファーセックス勉強会やワークショップ会場（啓発普及機能）

○情報センター機能として

・コミュニティの人がふらっと自由に立ち寄れて、セクシュアルヘルスに必要な情報やコミュニティの情報を持ち帰ることができる（情報の還元・普及機能）

・相談場所・窓口（相談機能）

○コミュニティセンター機能として

・コミュニティ交流プログラム会場（地域交流機能）

・コミュニティからのリアクションをフィードバックさせる（情報収集機能）

・リピーターを獲得し、その人達と相互に確実な情報伝達をくりかえすことによって、コミュニティ内のキーパーソンの育成をはかる。

（対象クライアント）

対象クライアントとして以下を想定した。

1. ゲイ関連商業施設従業員
2. ゲイ関連商業施設利用者
3. インターネット利用者
4. エイズ対策関連団体/個人

（成果目標）

成果目標として以下を想定した。

・当事者性を重視した予防啓発活動をコミュニティの中心エリアで実施し、コミュニティメンバーや関係機関との連携・協働により、セクシュアルヘルスの増進、セーファーセックスへの環境づくりを目指す
・distaを核としたコミュニティ・ネットワークを構築し、そのネットワークを通じてHIV/STIの予防や共生のメッセージと正しい情報が伝わってゆくことを目指す。
・情報と空間・時間を共有し、HIVを身近に感じる人が増えていくことで、HIV/AIDSの予防と共生の意識がコミュニティ全体に広がり、行動変容を促すことを目指す。

（運営体制）

2011年度は昨年に引き続き、基本オープン時間を水曜日～月曜日の17時ー23時とし、火曜日を休館日とした。土曜日には不定期でイベントを開催しその際はオープン時間を17時ー5時とした。17時ー20時をAシフト、20時ー23時をBシフト、及びイベント開催時の土曜日の23時ー5時をCシフトとして、運営スタッフとコンシェルジュ（ボランティア・スタッフ）がシフトを組んでdista運営業務に当たった。コンシェルジュは現在3名が稼働している。

（成果）

今年度の施設オープン時間は月平均 174.4 時間。来場者数は月平均 605.4 名であり、前年度より減少した。そのうち初来場者は月平均 59.5 名であり、これについても前年度より減少した。初来場者数は全体の 1 割程度であった。

減少の主な理由として、これまでに非常に多くの来場者を集めてきた予防啓発イベント＜PLuS+＞が、本年度開催されなかったことなどを挙げることができる。dista 利用状況及び利用者数年度別推移は【付表 2】【付表 3】、利用者年代別状況は【付表 4】のとおり。

今年度に開催したカフェイベントと教室の実施内容および展覧会内容は【付表5】【付表6】のとおり。

相談件数は月平均16.2件程度あった。その推移と相談内容は【付表7】及び【付表8】のとおり。

また、ふらっと来た来場者のうち特に初来場者については、コンシェルジュが積極的にコミュニケーションをとる方針を徹底させたことにより、distaの説明や予防、検査情報を確実に提供できた。

今後の課題として、相談員の育成と、幅広い年齢層に届く広報や企画を推進し、新規利用者の獲得と、相談と予防情報の提供を確実に行える予防・支援拠点としての充実を目指す。

(2) STI勉強会＜CAFE CHAT(2011年3月終了)＞＜Boy×Boy(2011年4月から開始)＞

（目的）

CAFE CHAT及びBoy×Boyはエロネタや恋愛ネタを中心に身近で興味をひくようなテーマを設定し、一義的な展開や啓発色の強いメッセージを発信するのではなく、自らの言葉で意見、情報を交換し、多様な性や生活のあり方を認め合いその雰囲気を共有するものである。自分達にとってのSEXを考え、語ることにより、SEXに対する興味や意識を喚起し、SEXと密接な関係にある性感染症に対する認識を促すことを目的とする。

また、SEXの話題の中にセーファーセックスに関する情報を盛り込んだり、プログラムの最後にSTIやセーファーセックスに関連す

る情報を提供するミニ勉強会を設けることにより、STIやセーファーセックスに対する知識向上と共に予防と共生の意識を浸透させることを目指すプログラムである。

（方法）

実施手法として以下の点を挙げることができる。

・ファシリテーターを設け対話形式での展開を行う。参加者が楽しんで取り組めるようテーマに沿った資材やゲーム等を使用。

・対話の場を問題なく円滑に進行させるためグランドルールを設ける。

・参加者が意見を発し、取り組みやすいような場所や雰囲気を設定する。

・プログラムの最後に15分程度のSTI勉強会や、SEXの話題の中にセーファーセックスを意識するような仕掛けを設ける。特に必要な情報として「感染症/経路/症状/対応/検査」「セーファーセックス/行為」「コンドーム/セックスの道具/使い方/入手方法」を盛り込む。

今年度は、毎月第2土曜日（18時～20時）に実施。対話や相談等の場となることに留意した。

広報としてdistaでのポスター貼付、SaL+やdista.bでの告知、mixiやtwitter等を用いた。

（成果）

エロネタや恋愛ネタなどの身近なテーマ設定により、積極的な参加と発言を促すことができた。

また、セックスや恋愛に関する実践的な話を共有することで、実生活に役立つ情報を共有し、実践に役立ててみるという声が聞かれるなど、情報を持ち帰ってもらうことの有意性が感じられた。

また、自身の経験をポジティブに語る機会は自身だけでなく他の参加者の経験に対してもポジティブに捉えることができ、安心して発言ができる雰囲気を作り出すことができた。その結果、性感染予防やセクシュアルアイデンティティの形成において対話することの重要性を実感し、それを共有する機会を作り出すことができた。

プログラムの最後に15分程度のミニ勉強会や対話の中でセーファーセックスを意識するための仕掛けを設けることで、必要な情報を的確に伝えやすく、参加者への意識づけが可能な機会となった。

回を重ねるごとにスタッフのファシリテーション技術の取得に関して向上が見られ、対話を使った啓発手法を効果的に利用できるようになった。また、企画の立案や情報の伝達の方法等においても参加者の目線に合わせた展開を実践できるようになった。

今後も新規クライアントの獲得を目指す場合の広報の手法や、運営体制の見直しを行い、今までのノウハウを活かしつつ更なる充実を目指す。プログラム実施状況は【付表9】のとおり。

(3)若年層ネットワーク構築支援プログラム＜step＞

（目的）

コミュニティにあまりアクセスしていない10代ー20代の若者をターゲットとしたプログラムである。プログラムの目的として以下の点が考慮されている。

・コミュニティや、MASH 大阪に未接触の若者に対する入り口となる事。

・参加者がdistaへアクセスするようになる事。

・他のプログラムへのボランティア・リクルートになる事。

（方法）

事業は以下の点に留意しつつ展開した。

・啓発色を出さず、季節感やお得感、遊びに行く、楽しむ、友達作りなどの企画を実施する。

・コミュニティスペースdistaへアクセスするきっかけを提供する。

・mixi（大手のSNS＝ソーシャルネットワーキングサイト）を中心とした広報宣伝を行う。
・プログラムに関わるスタッフの友人の中であまりSTIの情報に触れていないクライアントの参加を促進させる。
・企画運営実行は主にコミュニティの若者が中心に行う。

（成果）

今年度は12月末までの時点で4回の企画を実施した。実施内容は【付表 10】のとおり。

参加者は合計121名、そのうち初参加者が31名、過去に参加経験のある人は90名だった。

本プログラムの目的のうち、コミュニティやMASH大阪に未接触の若者に対する入り口となる事と、参加者がdistaへアクセスするようになる事については、今年度はあまり達成できていない。

昨年度に引き続き、コミュニティにあまりアクセスしていない層をうまくリクルートできなくなっているため、今後、企画内容や参加者募集のありかたについて再検討を要する。

(4)ハッテン場におけるセーファーセックス促進環境整備プログラム＜ハッテン場プロジェクト～β～＞

（目的）

このプロジェクトは、関西圏の商業系ハッテン場において、利用者に対して十分な量のコンドーム及びローションが、セックスが行われる場所からなるべく手の届く範囲において提供されるための環境を構築するために実施される。

商業系ハッテン場は、不特定多数のMSMがセックスすることを目的として集まる場所であることから、MSMのセクシュアル・ネットワークにおいて、中心性が強い空間であるといえる。実際にセックスを行なう空間であり、かつ会話などのコミュニケーションなしにセックスが成立する空間であるため、セーファーセックスに関するネゴシエーションを事前に行いにくい。そのため、この空間におけるセーファーセックスの実践は「利用者個々人の意識・態度」ならびに「施設の雰囲気・環境」に大きく左右される。そこで本プログラムにおいては「施設の雰囲気・環境についての介入」を試みる。

（方法）

このプログラムでは、関西圏の商業系ハッテン場の現地観察調査、オーナー・店長へのインタビュー調査（質問紙調査含む）、施設利用者へのインタビュー調査、利用者への質問紙調査、コンドームとローションの提供プログラムを組み合わせて実施し、関西圏の商業系ハッテン場において、コンドーム及びローションが利用者に対して十分な量で無償提供されるための環境を構築し、それに伴って利用者の感染予防行動がどのように変容するかを調査する。

（事業の成果）

本年度は十分なスタッフが確保できなかったため、本プログラムは凍結とした。

2.二次予防関連プログラム

1)クリニック検査キャンペーン

（目的）

クリニック検査キャンペーンは、エイズ予防のための戦略研究において、阪神圏のMSMの検査環境を改善し、HIV検査受検機会を拡大させる目的で、MSMが自身のセクシュアリティを気にすることなく受診できる診療所を開拓し、それらの診療所におけるMSMに対象を絞ったHIV検査の有効性を検討するために実施した。その結果、受検者のHIV陽性率が保健所等の無料匿名検査と比較して約10倍と高く、その有効性が実証された。そこで今年度は、公益財団法人・エイズ予防財団の

「平成23年度同性愛者等のHIVに関する相談・支援事業」の「同性愛者等向けHIV検査・相談事業」として実施されたHIV/STI検査プログラムにおける啓発・広報を受託し実施した。(検査自体は財団から協力医療機関への委託契約。)

(方法)

エイズ予防のための戦略研究において、大阪STI研究会を通じて協力を得た医師の診療所7ヶ所を引き続き定点とし、平成23年12月から平成24年2月末までの3ヶ月間、MSM向けにHIV等性感染症検査として「クリニック検査1,000円キャンペーン- Choices -」を行った。キャンペーンの広報はMSM以外の男性や女性が情報に曝露しないよう、MSMに対象を絞った媒体、啓発資材を用いてゲイ向け商業施設やWebにて行った。検査は有料(1,000円)で行ったが、これは診療所へ検査希望者が殺到しないよう、また保健所との差別化を図るためである。今年度からは、受検者数を増加させる目的で、7ヶ所の協力診療所のうち3ヶ所に迅速検査を導入してもらい、結果を1週間後に返す通常検査(HIV、梅毒、HBV、HCV、クラミジア)と、即日検査(HIV、梅毒、HBV、HCV)を受検者が実施診療所で選べる様にした。

(成果)

今回、キャンペーン実施期間中に189名の受検があり、1ヶ月間の平均受検者数は63名となった。戦略研究期間中の2009年と2010年に行ったキャンペーンでは8ヶ月間でそれぞれ272名、263名の受検があり、1ヶ月平均ではそれぞれ34名、32.9名であったが、今回の平均受検者数は、即日検査導入の効果か、戦略研究時と比較し約2倍に増加した。一方、陽性率であるが、今年度HIV陽性者は6名であり陽性率は3.2%と、戦略研究の時と比較して若干減少した(2009年:4.4%、2010年:5.7%)が、保健所等と比べると引き続き高い陽性率であり、対象を絞った広報と理解のある診療所の協力により、MSMに対象を絞ってHIV検査を普及させる本プログラムの有効性が、引き続き実証された。

2) ゲイナイトにおける予防啓発および郵送検査キット配布プログラム(「club THIRD」)

(目的)

我が国最大級のゲイナイト・イベント「NUDE」の会場の一部を利用して、エイズ予防啓発イベントclub THIRDを実施した。普段HIV/STIに積極的な関心を持たないMSMを対象にイベントの高揚感の中で、なんばHatch5〜6階部分で行なわれるイベントと並行して、3階エントランスロビーにおいてエイズやその他の性感染症に関する啓発プログラムを提供することで、イベントを楽しんだ結果として自然に予防啓発と共生のメッセージに触れ、HIV/STIに関するより深い認知が獲得されることをめざした。

郵送検査配布の対象層として、HIV検査は受けたいが、保健所・医療機関には何らかの理由(時間がない、対面を避けたい、自分のペースでできない、など)で行きにくいと感じているMSM層とし、彼らを検査につなげることを目的とした。

なお、本プログラムは、平成23年度大阪市「個別政策層に対するエイズ予防啓発事業」および大阪府「地域再生医療基金」の委託事業として執行した。

(方法)

広報はゲイコミュニティを中心に行った。広報の媒体はフライヤー、ホームページ、口コミ、mixi、Twitterであった。郵送検査キット配布プログラムの方法としては、MASH大阪独自のシステム(下記①〜⑨参照)を盛り込んだ郵送検査キットを3階ロビーにて配布した。

① 郵送検査キット用のステッカーを作成し、キットに貼付した。ステッカーには使用期限、法律による転売・販売

の禁止、会場での使用禁止の情報を入れた。

② 郵送検査キット用にリーフレットを作成し、キットに添付した。リーフレットの内容は、HIV 検査の基礎知識、郵送検査の基礎知識、郵送検査のデメリットの説明と郵送検査以外の検査の紹介、スクリーニング検査で陽性となった場合の確認検査への促しと確認検査実施機関の紹介、不安・疑問を覚えた場合に利用できる相談先リスト、関西・大阪地域の HIV 発生動向、HIV 治療・福祉の現状、郵送検査の結果を一人で WEB 上にて確認するのが不安になった人向けのサービスの紹介（下記⑦参照）、自分自身の感染リスクを自己点検するチェックリストの計９項目であった。

③ GCQ アンケートに回答し固有番号を発行された NUDE 入場者へ、郵送検査のデメリット（スクリーニング検査しか行なわれない、一人で結果を確認するものである等）について説明するチェック項目を記載した「郵送検査キット引換証」を配付した。

④ 郵送検査キット引換証の全チェック項目に対して、「理解した」と本人のチェックがすべて入っていることを個別に確認した上で郵送検査キットと交換した。

⑤ HIV・エイズに関する正しい知識や郵送検査の理解度を高めるための大型パネルを作成し、club THIRD 会場で展示した。内容については、上記リーフレットと同じ内容とした。

⑥ 郵送検査会社の WEB 上に陽性結果の場合の確認検査への促しと確認検査実施機関の紹介、HIV サポートライン関西等、不安・疑問を覚えた場合に利用できる相談先リストを登載し、検査キット利用者に情報を提供した。

⑦ 郵送検査の検体を郵送検査会社に送付したものの、自分自身では検査結果を知るのが不安になった人向けに、匿名性を保ったまま専門の相談員の付き添いで web の検査結果を確認出来るような仕組みを、配付前に準備した。

⑧ 2 週間に 1 回程度、検査キット利用者数、スクリーニング検査陽性者数の情報共有を行った。

⑨ 検査キットは 1,000 キット準備した。（うち大阪府委託分 500 キット）大阪府への請求は実績払いとし、500 キットを上限とした。なお、検査の有効期限は平成 24 年 2 月 29 日とした。

（結果）

- なんば Hatch への来場者は 1,420 人であった。
- 郵送検査キットの配布数は 278 個（19.5%）であった。来場者の５人に１人が検査キットを受け取ったと考えられる。
- 実際に郵送検査キットを利用し、検査機関に検体が届いた件数は 3 月 5 日現在で、100 件となった。うち、陽性が 5 件（5%）となった。検査不能（採血量不足）数は 10 件あった。

3. 三次予防関連プログラム

1) HIV サポートライン関西

＜HIV サポートライン関西＞は、HIV 陽性の人とパートナー・家族のための電話相談である。これまで毎週 1 回（1 回あたり 2 時間）実施してきたが、今年度中に週に 2 回にすることを目標として、相談員増員のための研修を継続した。その結果、相談員が昨年度末に 1 名、今年度 1 名研修を終え、相談員が 6 名となった。週に 2 回体制を組める相談員数となったため、2012 年 1 月より週 2 回の実施を開始した。

2011 年 4 月～2011 年 2 月 15 日現在で、48 回

（96 時間）実施、36 件の相談に対応した。36 件の利用者内訳は、陽性者本人 15、スクリーニング陽性本人 5、陽性者のパートナー・家族・友人 5、検査中および感染不安等 11 であった。【付表 11、12】

2) ひよっこクラブ

＜ひよっこクラブ＞は、HIV 陽性とわかって間もない人のための少人数制のグループ・プログラムで、全 3 回隔週で開かれるミーティングである。スタッフ構成は、HIV 陽性者であるピアサポーター、グループ進行経験のあるスタッフサポーター、2 回目の医療情報セッションを担当するメディカルサポーター、コーディネーターである。昨年度末から今年度にかけて、研修を経たスタッフサポーター2 名の増員をした。ミーティングの進行は、ピアサポーターとスタッフサポーターがペアで担う。

参加者募集は WEB サイトや SNS、拠点病院および保健所、大阪府立公衆衛生研究所等に配布している紙資材を通じて行うとともに、拠点病院の医療従事者の協力を得て案内をしてもらっている。したがって、参加申込みは、本人が直接申し込む場合と、医療従事者を通じて申し込む場合がある。前者はコーディネーターがインテイクおよびオリエンテーションを事前に対面で行う。後者は、医療従事者のインテイクを経ての申込みとなり、オリエンテーションはコーディネーターが対面で行う。今年度は、6～7 月、10 月、1～2 月に計 3 期を実施し、申込み人数は計 21 人、参加者は計 13 人であった。参加申込み人数が定員（6 人）オーバーとなった期もあり、次期への参加となった人が複数いた。【付表 11、13】

3) プログラム広報

両プログラムともに紙資材（サポートラインカード、ひよっこクラブフライヤーおよびちらし）と WEB サイトにて周知を行っている。紙資材は、大阪府立公衆衛生研究所の協力により、研究所にて確認検査が陽性となった人の結果通知書とともに、同封され、陽性とわかるその時に本人に渡るような工夫をしている。また、近畿圏の拠点病院や保健所・センターに広く配布して陽性とわかる時にリソースのひとつとして案内してもらえるよう依頼している。WEB サイトは今年度リニューアルを行なった。MASH 大阪のクリニック検査キャンペーン広報資材やサイト等の検査情報と同時に陽性とわかった際のリソースとして掲載、またコミュニティペーパーに随時掲載し、陽性であるかないかに関わらずに MSM への周知を拡大することに努めている。【付表 11～13】

4. MSM を対象とした質問紙調査

（クラブイベント・郵送検査キット配布に関連した調査）

ゲイナイト・イベント「NUDE」会場の一部を利用して実施したエイズ予防啓発イベント club THIRD が行われた。郵送検査キットが配布される前に GCQ アンケートを実施し、郵送検査の受取の有無別に分析した結果を付表 14-21 に示した。重複回答を除く全回答者 439 人で、その内近畿在住の MSM は 315 人であった。郵送検査キット未受取群と受取群との間で有意に異なる項目は殆どなく、生涯の HIV 検査受検割合はそれぞれ 69.2%、66.7%、過去 1 年間の受検割合も 41.9%、40.4%であった（付表 17）。

（G-Com Quest 調査）

大阪で実施された G-Com Quest 調査では近畿地域在住 MSM は 315 人で、年齢階級別の分析結果を付表 22-28 に示した。29 歳以下が 2/3 を占める回答であった。友人・知人に HIV 感染者が「いる」の回答は 33.3%、友人・知人と HIV/AIDS について話したことが「ある」の回答は 60.6%であった。いずれも年齢による差異はなかった（付表 23）。HIV 検査受検経験割合は、生涯受検では 67.6%で、年齢別にみると 29 歳以下が 62.5%、30-39 歳 76.5%、40 歳以上 67.6%と有意差があった（P＝0.04）。また過

去1年間の受検経験率は41.0%で、29歳以下40.5%、30-39歳41.8%、40歳以上41.2%であった（付表24）。コミュニティセンターへの訪問率は47.0%、コミュニティペーパーを読んだことがある割合は67.0%、MASH大阪が実施しているクリニック検査キャンペーンを利用した割合が9.8%で、いずれも年齢による差異はなかった(付表28)。

D.考察

年度初頭に掲げた研究計画の項目にそって、研究事業の実施状況を総括する。

（一次予防関連）

・コミュニティペーパー＜SaL+＞は、計画通りに執行された。内容面での傾向も昨年を踏襲したものとなった。

・ドロップインセンター＜dista＞は、計画通りに執行された。利用者及び新規利用者は減少したが、前述の通り減少の理由は明確であり、計画の執行が滞りなく進められたと判断できる。

・若年層のネットワーク育成＜Step＞は、計画通りに執行されたが、ターゲットとする層からのリクルートに課題を残す結果となった。

・STI 勉強会＜Café Chat＞は、プログラムの名称と内容が変更されたが、これまでの質が維持され、参加するクライアント数もほぼ前年までの水準を維持した。

・ハッテン場プロジェクトはスタッフの確保が困難となり、凍結とした。

（二次予防関連）

・STIクリニックでの受検を促進するプログラム＜クリニック検査キャンペーン＞を実施した（2012年2月末まで）。今年度は実施期間が3ヶ月間と、戦略研究の時の8ヶ月間と比較して短くなったため受検者総数は減少したが、協力診療所7ヶ所中3ヶ所の検査法に即日検査を導入したことにより、一ヶ月平均の受検者数は約2倍に増加した。また、HIV陽性者は6名であり陽性率は3.2%と、戦略研究の時と比較して若干減少したが、保健所等と比べると引き続き高い陽性率を維持しており、MSMに対象を絞った広報と診療所の協力によりHIV検査を普及させる本プログラムは極めて有効であった。

・2012年1月8日、クラブイベントと協働し、郵送検査キット配布を実施した。郵送検査のメリットやデメリットについて具体的に検証する機会ともなった。今回の配布においては、デメリットを極力軽減する工夫を施したが、現在の郵送検査のあり方では、この検査で陽性となった人が確認検査を受けたかどうか確認する方法がなく、結果的に医療に繋がったかどうかを知る手段も無い。郵送検査で陽性と分かった場合でも個人のプライバシーを損なわずに医療につながる、もしくはつながりやすい道筋をつけることが課題となった。

（三次予防関連）

・NPO法人CHARMにより陽性者に向けた＜HIVサポートライン関西＞および＜ひよっこクラブ＞の2つのプログラムが執行された。予防や受検促進の啓発と並行して陽性者のためのサポートの存在を伝えることができるようになった。

（アウトリーチ関連）

・配布部数、参加するボランティア数、配布先店舗数など、昨年と同様の規模と質を維持した。

（アドボカシイ関連）

・昨年に引き続き行政との協働事業が展開した。兵庫県との関係構築が進展し、大阪市が改定をすすめている予防指針に対して助言を行った。

・CBOとの連携事業の展開としては、これまでの継続にとどまり、特に新しい進展はみられなかった。

（研究関連）

・平成 21 年度に引き続き MSM 対象質問紙調査が実施された。

（学会等での情報発信）

・第 10 回アジア・太平洋地域エイズ国際会議、第 25 回日本エイズ学会学術集会・総会において、研究協力者から MASH 大阪の活動に関する評価研究発表がなされた。（下記発表論文等を参照）

E. 結語

1. プログラムはおおむね計画通りに継続された。コミュニティペーパー＜SaL+＞は、すでに長期間継続的に実施されているものであり、その効果も実証されている。量的、質的エビデンスも蓄積されてきており、本年度から事業化されたことで、運営基盤がより安定した。
2. 「エイズ予防のための戦略研究」によって整備されたプログラムの多くが「同性愛者の HIV に関する相談・委託事業」によって引き継がれ、公費により委託を受けた民間非営利セクターが一次・二次・三次予防のプログラムを実施する状況が大阪地域に定着した。
3. 二次予防関連プログラムとして「クリニック検査キャンペーン」および「ゲイナイトにおける郵送検査キット配布」を実施した。「クリニック検査キャンペーン」は月平均で昨年度の二倍のクライアントが参加し、受検促進およびセクシュアルヘルス向上の点で成果があった。「郵送検査キット配布」は、感染者掘り起こしの点で一定の成果が見られたが、確認検査につながったかどうか確認できない点に課題を残した。
4. 本年度はアウトリーチのボランティア募集に困難であった。アウトリーチ体制の再構築が喫緊の課題である。
5. 地方自治体が進める「予防指針」策定作業への参画、保健師研修への協力などの点において、行政との協働事業に進展が見られた。

F. 発表論文等

（論文）-海外

1. ○Jane Koerner, Satoshi Shiono, Seiichi Ichikawa, Noriyo Kaneko, Hiroyuki Tsuji, Toshio Machi, Daisuke Goto, Tetsuro Onitsuka: Factors associated with unprotected anal intercourse and age among men who have sex with men who are gay bar customers in Osaka, Japan, Sexual Health, Volume 9999 (Issue9999), 2012 http://dx.doi.org/10.1071/SH11081

（論文）-国内

1. ○金子典代,大森佐知子,辻宏幸他：ゲイ・バイセクシュアル男性における HIV 感染予防行動のステージと関連要因―大阪市内での商業施設利用者への質問紙調査から,日本公衆衛生雑誌 58(7), 501-514, 2011-07
2. 川畑拓也,小島洋子,森治代：HIV/AIDS 感染者・患者の多い地域における公衆衛生専門機関の現状と課題,日本公衆衛生雑誌 74(11),914-917,2010-11
3. 川畑拓也：HIV 対策―大阪府の現状と公衛研の取り組み,病原微生物検出情報(IASR), 31(8),228-229,2010-08

（口頭発表）-海外

1. ○ Tetsuro Onitsuka, Sohei Yamada, Hiroyuki Tsuji, Daisuke Goto, Toshio Machi, Takaki Toda, Hirokazu Kimura, Kumiko Nakamura, Seiichi Ichikawa: Analysis of Paper Media Contents Targeting Gay Commercial Venue Users: A Traditional Approach to Outreach MSM in the Osaka Region, the 10th ICAAP 2011 Busan, 28 Aug 2011
2. ○Tetsuro Onitsuka, Hiroyuki Tsuji, Jane Koerner, Noriyo Kaneko, Seiichi Ichikawa: The HIV/AIDS epidemic among

MSM in Japan: Background & gay NGO responses, 1st Developed Asia Regional Consultation on HIV in MSM and TG, Singapore, 2nd-3rd, Dec. 2010

3. ○Tetsuro Onitsuka, Jane Koerner, Noriyo Kaneko, Seiichi Ichikawa: The HIV/AIDS epidemic among MSM in Japan: Background & gay NGO responses, Satellite Symposium on HIV infection in developed east and south-east Asia, ICAAP Bali, 11 Aug 2009, Bali
4. ○Tetsuro Onitsuka, Jane Koerner, Noriyo Kaneko, Hiroyuki Tsuji, Daisuke Goto, Yukio Cho, Satoshi Shiono, Suguru Uchida, Mie Takenaka, Seiichi Ichikawa: HIV infection rates, risk & preventive behaviors of MSM in Asia: How does Japan compare?, Poster presentation, ICAAP Bali, 10 Aug 2009, Bali
5. ○Tetsuro Onitsuka, Jane Koerner, Noriyo Kaneko, Sohei Yamada, Satoshi Shiono, Hiroyuki Tsuji, Daisuke Goto, Toshio Machi, Sachiko Omori, Hirokazu Kimura, Seiichi Ichikawa: HIV risk & sexual behaviors of Middle Aged MSM: Findings from the 2007 Osaka bar survey, Poster presentation, ICAAP Bali, 10 Aug 2009

（口頭発表）-国内

1. ○鬼塚哲郎, 辻宏幸, 後藤大輔, 町登志雄, 内田優, 山田創平, 塩野徳史, 市川誠一：大阪の屋外啓発大規模イベント『PLuS+』とその評価, 第25回日本エイズ学会学術集会・総会, 2011年12月1日, 東京
2. 川畑拓也：これからのHIV検査体制, 第5回京滋HIVカンファレンス講演会, 2011年6月25日
3. ○川畑拓也, 辻宏幸, 後藤大輔, 町登志雄, 内田優, 鬼塚哲郎, 小島洋子, 森治代, 高野操, 塩野徳史, 田端運久, 古林敬一, 岩佐厚, 高田昌彦, 菅野展史, 亀岡博, 大里和久, 市川誠一:対象を絞った広報と診療所におけるHIV検査の組み合わせによる効果的なエイズ対策, 平成23年度地方衛生研究所全国協議会近畿支部ウイルス部会研究会, 2011年9月30日
4. ○川畑拓也, 辻宏幸, 後藤大輔, 町登志雄, 内田優, 鬼塚哲郎, 小島洋子, 森治代, 高野操, 塩野徳史, 田端運久, 古林敬一, 岩佐厚, 高田昌彦, 菅野展史, 亀岡博, 大里和久, 市川誠一:対象を絞った広報と診療所におけるHIV検査の組み合わせによる効果的なエイズ対策, 第1回AIDS文化フォーラムin京都, 2011年10月2日, 京都
5. ○岳中美江, 辻宏幸, 川畑拓也, 有馬和代, 古林敬一, 鬼塚哲郎, 塩野徳史, 市川誠一：エイズの予防と共生をテーマにした野外イベントPLuS＋におけるMSMを対象としたHIV迅速検査会の実施について－エイズ予防のための戦略研究MSM京阪神グループ－, 第25回日本エイズ学会学術集会・総会, 2011年12月1日, 東京
6. ○川畑拓也, 辻宏幸, 後藤大輔, 町登志雄, 内田優, 鬼塚哲郎, 小島洋子, 森治代, 高野操, 塩野徳史, 田端運久, 古林敬一, 岩佐厚, 高田昌彦, 菅野展史, 亀岡博, 大里和久, 市川誠一:対象を絞った広報と診療所におけるHIV検査の組み合わせによる効果的なエイズ対策- エイズ予防のための戦略研究MSM京阪神グループ- , 第25回日本エイズ学会学術集会・総会, 2011年12月2日, 東京
7. ○大野まどか, 岳中美江, 柏木瑛信, 白野倫徳, 伊達直弘, 野坂祐子, 松浦基夫, 矢島嵩, 生島嗣, 青木理恵子, 市川誠一：演題発表「地域における新HIV陽性者対象のプログラム実践について—エイズ予防のための戦略研究MSM京阪神グループ—」, 第25回日本エイズ学会学術集会・総会, 2011年12月1日, 東京
8. ○川畑拓也, 辻宏幸, 後藤大輔, 町登志雄, 内

田優,鬼塚哲郎,小島洋子,森治代,高野操,塩野徳史,田端運久,古林敬一,岩佐厚,高田昌彦,菅野展史,亀岡博,大里和久,市川誠一:対象を絞った広報と診療所におけるHIV検査の組み合わせによる効果的なエイズ対策- エイズ予防のための戦略研究MSM京阪神グループ- ,第2回日本性感染症学会関西支部学術大会,2011年12月17日,京都

9. ○鬼塚哲郎:共催セミナー「HIV感染対策研究における人文学の応用可能性その2」における「コミュニティペーパーによる予防介入事業の文化研究的分析の試み」,第24回日本エイズ学会学術集会・総会,2010年11月24日,東京

10. ○山田創平:共催セミナー「HIV感染対策研究における人文学の応用可能性その2」における「HIV感染対策研究における社会・文化研究の重要性」発表,第24回日本エイズ学会学術集会・総会,2010年11月24日,東京

11. ○川畑拓也,森治代,小島洋子,市川誠一,塩野徳史,鬼塚哲郎,辻宏幸:MSM を対象とした HIV 検査キャンペーン,第 24 回近畿エイズ研究会学術集会,2010 年 6 月 12 日,大阪

12. ○山田創平,鬼塚哲郎,辻宏幸,後藤大輔,鍵田いずみ,内田優,町登志雄,塩野徳史,市川誠一:商業施設を利用するMSM(Men who have Sex with Men)向けHIV感染予防プログラムの開発に関する形成的研究,第23回日本エイズ学会学術集会・総会,2009年11月26日,名古屋

13. ○鬼塚哲郎:サテライトシンポジウム「HIV感染対策研究における人文学の応用可能性」における「HIV感染対策研究における人文諸学の意味と役割」発表,第23回日本エイズ学会学術集会・総会,2009年11月27日,名古屋

14. ○山田創平:サテライトシンポジウム「HIV感染対策研究における人文学の応用可能性」における「HIV 感染対策研究への地域研究の応用」発表,第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会,2009 年 11 月 27 日,名古屋

15. ○川畑拓也:シンポジウム「MSM社会とのインターフェイス- 臨床・検査・社会の協働における「検査の現場から見たMSM —HIVに感染していない大部分のMSMへの感染を防ぐために—」発表,第23回日本エイズ学会学術集会・総会,2009年11月26日,名古屋

【付表 1：SaL+配布実績- 2011 年度（2012 年 1 月末時点）】

期間	配布された施設 (昨年度の数値)	送付団体・個人 (昨年度の数値)	配布された部数 (昨年度の数値)	配布スタッフ延べ数 (昨年度の数値)
2011 年 4 月	191 店舗(193 店舗)	41 団体（40 団体)	6667 部(6658 部)	16 名(18 名)
5 月	192 店舗(185 店舗)	42 団体（40 団体)	6837 部(6708 部)	23 名(16 名)
6 月	194 店舗(191 店舗)	42 団体（39 団体)	6756 部(6762 部)	19 名(16 名)
7 月	194 店舗(187 店舗)	42 団体（39 団体)	6777 部(7077 部)	21 名(21 名)
8 月	192 店舗(187 店舗)	42 団体（39 団体)	6712 部(6712 部)	17 名(23 名)
9 月	194 店舗(192 店舗)	42 団体（39 団体)	6682 部(6687 部)	15 名(32 名)
10 月	194 店舗(193 店舗)	42 団体（41 団体)	6707 部(6697 部)	17 名(16 名)
11 月	190 店舗(193 店舗)	42 団体（42 団体)	6537 部(6845 部)	20 名(17 名)
12 月	193 店舗(192 店舗)	42 団体（42 団体)	6562 部(6720 部)	17 名(12 名)
2012 年 1 月	190 店舗(191 店舗)	団体（42 団体)	6447 部(6720 部)	10 名(14 名)
2 月	店舗(192 店舗)	団体（42 団体)	部(6655 部)	名(17 名)
3 月	店舗(191 店舗)	団体（40 団体)	部(6715 部)	名(11 名)
4 月ー1 月	月平均 192 店舗	月平均 42 団体	月平均 6668 部 合計 66684 部	月平均 17.5 名 合計 175 名

【付表 2：dista 利用者状況- 2011 年度（2012 年 1 月末時点）】

期間	MASH 大阪 業務利用者 (うち初来場者)	イベント来場者 (うち初来場者)	ふらっと来た人 (うち初来場者)	貸し出し (うち初来場者)	合計 (うち初来場者)	稼働時間
4 月	50 名(8 名)	199 名(30 名)	500 名(39 名)	0 名(0 名)	749 名(77 名)	177.5 時間
5 月	49 名(8 名)	111 名(5 名)	495 名(54 名)	7 名(0 名)	662 名(67 名)	180.0 時間
6 月	42 名(12 名)	138 名(6 名)	408 名(34 名)	21 名(0 名)	609 名(52 名)	195.5 時間
7 月	48 名(1 名)	114 名(4 名)	465 名(31 名)	0 名(0 名)	627 名(36 名)	179.0 時間
8 月	35 名(0 名)	30 名(6 名)	468 名(47 名)	10 名(2 名)	543 名(55 名)	161.0 時間
9 月	33 名(1 名)	137 名(2 名)	390 名(41 名)	11 名(1 名)	571 名(45 名)	176.5 時間
10 月	86 名(8 名)	173 名(12 名)	376 名(36 名)	34 名(8 名)	669 名(64 名)	194.0 時間
11 月	50 名(1 名)	252 名(72 名)	365 名(45 名)	10 名(2 名)	677 名(120 名)	160.0 時間
12 月	74 名(1 名)	123 名(9 名)	316 名(30 名)	9 名(1 名)	522 名(41 名)	173.0 時間
1 月	41 名(4 名)	96 名(5 名)	274 名(28 名)	8 名(0 名)	425 名(38 名)	148.0 時間
2 月	名(名)	名(名)	名(名)	名(名)	名(名)	時間
3 月	名(名)	名(名)	名(名)	名(名)	名(名)	時間
年度合計	508 名(44 名)	1373 名（151 名)	4057 名（385 名)	110 名(14 名)	6054 名（595 名)	1744.5 時間
月平均	50.8 名 (4.4 名)	137.3 名 (15.1 名)	405.7 名 (38.5 名)	11.0 名 (1.4 名)	605.4 名 (59.5 名)	174.4 時間